



切磋琢磨

【発行日】平成30年3月20日
 【発行者】角田高等学校
 校長:鈴木 琢也
 【連絡先】0224-63-3001

失敗から学ぶ！1年を振り返り、新しい目標を立てさせてください！

私は失敗するのが嫌で、できるだけ失敗しないように心がけてきましたが、不思議なことに失敗して恥ずかしい思いをした時の方が鮮明に記憶に残っています。

1874年にフランスで「第1回印象派展」が開催されました。フランスで活動していた若い画家たちが、国の唯一の展覧会“サロン”に出品しますが、何度出品しても認められません。保守的な作品しか入賞しないサロンに反旗を翻してサロンで落選した作品を集めて落選展を開いたのが印象派展でした。出品した作品には、人物の陰影に青や緑を使っていたため「腐った肉のようだ」とか「単なる印象に過ぎない」と酷評されました。批評家の一人が、モネの「印象・日の出」という題名から皮肉交じりに風刺新聞の記事で取り上げたのが後に印象派と言われるようになりました。しかし、この展覧会がなければ、現在の幅広い表現にはつながらず、ゴッホやピカソの作品も生まれていなかったのです。失敗から学ぶことは多いものです。

勉強でも同じです。間違えたところは納得するまで理解して、次に備えることが重要です。

年度末を迎え、生徒諸君にもこの1年を振り返って新年度に向けての目標を立てさせてほしいと思います。

復活第28回 小齋伝統 奉射祭(やぶさめ)に行ってきました！

平成30年3月11日(日)小齋に古くから伝わる伝統行事の奉射祭に行ってきました。会場である鹿島神社の由来によると、1643年に始めて行われ、その後戦争により幾度かの中断を経ましたが、平成3年に復活して今年で28回を迎えました。

まだまだ冷え込みの厳しい朝、弓士に選ばれた若者10人(本校の卒業生も含まれていました)が水垢離をして体を清め、お祓いを受けた後、神事が始まりました。1年間の天候を占う「御神的神事」、10間(18m)先の大的に10人が6本ずつの矢を射る「大的射礼」に続いて、クライマックスは15間(28m)先にある1尺(30cm)の的を狙って、10人が10本ずつの矢を射る「かりがねの的射礼」と続きます。的までの距離が長い上、的が小さいための的中させるのは困難ですが、今年は100本中32本が的中しました。

「かりがねの的射礼」と同じ的を使って行われた「高校生射礼」には、伊具高校弓道部員とともに、本校弓道部女子副部長の2年高野靖菜さんが出場しました。4本中2本の矢を的中させ、大きな歓声が起こりました。地元の伝統行事に参加するのも地域理解につながります。



国公立大学進学者が10名に達しました！

大学名	学部	学科・コース	公募	AO	一般
福島大学	人文社会	行政政策	1		
	理工	共生システム理工		3	
山形大学	人文社会科	経済マネジメント	1		
	工	高分子・有機材料工	1		
	理	理			1
弘前大学	理工	数物科学			2
宮城大学	事業構想				1
合計			3	3	4

この3月の卒業生の四年制国公立大学への進学者が、数年ぶりに10名に達しました。数字が全てではありませんが、高い目標を立て、その目標を実現させたことは素晴らしいことです。

後輩諸君も先輩を見習って高い目標を立てて努力して欲しいと願います。

※数字は3月19日現在です。

●特別寄稿 その7 「自分の道は・・・」 教頭 長谷川俊一

登校坂の土手に顔を出した「ふきのとう」が春の訪れを感じさせる3月中旬、グラウンドや体育館では部活動に取り組む生徒の声が響き渡っている。私が角田高校に着任してから3年の月日が過ぎ去ろうとしている。思い起こせば、「駐車場にたどり着くまで、アプローチが長い坂。しかもスロープの途中に横断歩道が2箇所も・・・」これが3年前に私が感じた角田高校の第一印象であった。角田城跡地に建てられていることを知らずにいた私が無知であったためであるが。

さて、自分の高校時代を振り返ってみたい。私は出身地である山形県鶴岡市にある国立鶴岡工業高等専門学校、いわゆる鶴岡高専の機械工学科に入学した。中学生の頃、文化祭に友人と訪れた際、充実した施設・設備を備えた鶴岡高専がまるで大学のように自由な校風をもっているように感じられ、憧れを抱いた。加えて理科が好きな教科だったこともあり、それが受験の契機になったのかもしれない。

しかし、私は中学時代の実技教科である「技術」、「美術」、「音楽」はきわめて不得意で、すこぶる評価(成績)が低かった。このことが鶴岡高専への入学後、大きな壁となって私の前に立ちだかっていた。つまり、実技が不得意な自分に気付く、私は真剣に悩み始めたのである。機械工学に係る教育課程には1年生から実習や専門教科があり、2年生、3年生と進級していくうちに専門科目がどんどん増加していった。特に機械実習で行う旋盤やフライス盤、鍛造や鋳造で製作した自分の作品をみると、同級生のそれよりも寸法が著しく不正確で見栄えも劣っていた。今思うと、特異な教育課程が編成され、2年生から「ドイツ語」の授業が始まり、これも大きなプレッシャーになっていた。そして、とても普通教科に手がまわらないほど専門教科の課題やレポート作成に追われる日々であった。それに鶴岡市内に自宅のある生徒でも4人部屋での寮生活が2年間、義務付けられていた。朝5時30分に起床して6時からのラジオ体操、部屋は夜10時の消灯と決められていて、自由の度合いが少なく、現在では考えられないような環境であった。

自分に不適な分野を歩んでいることを悩み、1年生の終わり頃に「高専では3年生の修了時に高校卒業と同様の資格を得られること」を利用し、大学受験を目指すことを心に決めた。そして、担任の教員や親に相談して、細かい技術を要する機械工学を対象とする分野ではなく、大自然を対象に学ぶ農学部に入學しようと決意した。しかし、「クラスメイトと異なる学習(受験勉強)に取り組むこと」や「大学受験の教育に係る雰囲気全くないこと」など、受験生のいない異次元の世界での勉強は孤独で大変辛かった。そして、私は他人に気付かれないように自然と秘密裏に教室や寮の中で受験勉強を行うようになっていた。特に寮の部屋で仲間には気付かれないように朝、5時頃に朝陽を頼りにして布団の中で数学の問題に取り組んだり、英語の熟語を覚えたりしたこともあった。その点で、受験教科を思う存分学習できる普通高校が羨ましく思えてならなかった。

幸運にも地元の大学に合格でき、結局、理科の教員になって今日に至る訳であるが、今思うと15歳～18歳の頃は年齢なりに将来について迷い、真剣に考える日々を過ごす自分がいた。角田高校生の皆さんは、どのように自分の将来を頭に描いているだろうか？選んだ道がふさわしいか、そうでないかは、自分が判断することであるし、誰かに相談したとしても他人に決断させることではない。当然のことであるが、自分の道は自分で決める。これができなければ、大人になることができないと考えている。自分が成長するためには、高校時代にいろいろなことにチャレンジし、例え失敗を重ねても前に向かって歩き続け、自ら道を切り開いていくことが大切なのではないだろうか。

最後に私の好きな魯迅の『故郷』にある文章を記載して、原稿を閉じることとする。

「希望とはあるものだとも言えぬし、ないものだとも言えない。それは地上の道のようなものである。もともと地上に道はない。歩く人が多くなればそれが道になるのだ」

●書籍を寄贈していただきました

旧角田高校第9回卒業の森喜憲様からご自身が編著した「国際司法裁判所・判決と意見」第4巻・第5巻を御寄贈いただきました。森さんは元内閣官房内閣調査官を務められ、定年後も研究を続けていらっしゃるということです。過去に第1巻～第3巻までが寄贈されており、併せて図書館の臥牛文庫に所蔵して、生徒に閲覧させたいと思います。ありがとうございました。

